

消灯されたフロアに、キーボードを叩く音だけが残っていた。

定時を三時間過ぎたあたりで、ようやく最後のデータを保存する。背もたれに体重を預けてから立ち上がると、デスクの向こうで律元くんがちょうどジャケットを羽織るところだった。

「先輩、お疲れ様でした。今日、資料の件ずいぶん大変そうでしたね」

声をかけながらこちらへ向かってくる。柔らかい目元、人懐こい笑顔。私のデスクの前を通るとき、整理が苦手で、散らばった印刷物をさりげなく揃えて置いていく。そういう、気の利く後輩だ。

「ありがとう。律元くんもお疲れ様。課長から言われた新しい企画どう？」

「先輩のおかげで、なんとかやっています！」

「またまた。律元くんが優秀だからだよ」

新卒で入ってきたのが去年の春。仕事を覚えるのが早くて、ミスをすれば素直に謝って、先輩には必ず「ありがとうございます」を忘れない。

朝、コーヒーを買いに行くついでに「なにか要りますか」と声をかけてくるし、会議の前には「資料、追加で準備しましょうか」と聞いてくれるし、こんな時間まで残業している私を見ても、じゃあ俺も、と当然のように残って外部連絡の整理を引き受けていた。

本当に気の利く、よく出来すぎた後輩だ。

（他の先輩たちからも気に入られているみたいだし、出世も早そうだな）

「先輩、終電、大丈夫ですか？」

「え、ああ……。ちょっと、ぎりぎりかな。急ごう」

並んでエレベーターへ向かう。夜のオフィスは足音がよく響いて、ヒールとローファーの音が交互にタイルを打つ。

律元くんの歩幅は私より少し大きいのに、いつも

さりげなく半歩さげて合わせてくれる。今夜もそうだった。雑談も、声のトーンも、私の横に立つ距離感も。廊下の非常灯が二人分の影を伸ばして、それだけがやけに静かだった。

やがてエレベーターの扉が開いた。そこに二人で乗り込む。

「今週もお疲れ様でした」

「律元くんもね。遅くまでありがとう」

ボタンを押す。一階。数字が一つずつ減っていく。二十一、二十、十九。律元くんは扉の横に寄りかかって、スマホを確認するでもなく、ただ前をぼんやり見ていた。

閉じていく扉を眺めながら、ふと息をついた。

（早く帰ってお風呂入って寝よう）

普段通り、それまでと、なにも変わらなかった。けれど、二十三階と一階のちょうど中間あたりで

エレベーターが止まった。衝撃もなく、音もなく、ただ静かに。

「えっ！？」

私は思わず扉を見た。当然、開かない。数秒の沈黙のあと、スピーカーから無機質な女性の声が流れた。

「ただいま点検中です。しばらくお待ちください」

天井の表示が切り替わる。蛍光オレンジの文字で、点検中と表示される。密閉された空間がいきなり重くなった気がした。

「点検中、って……。なに？ 故障？」

「どうなのでしょう……。とりあえず、非常ボタンから連絡をとみましょう」

律元くんが迷わず壁面のパネルへ向かい、非常通

話ボタンを押した。

プッ、と発信音がして、数秒後に応答が返ってくる。

「はい、ビル管理センターです」

「すみません、二十三階と一階の間に、エレベーターが止まってしまって」

落ち着いた声で、状況を端的に伝える。こういうときも、頼りになる後輩だ。

(私一人だけだったら、パニックになっていたかも……)

保留音が流れた。電子音が、密閉された籠の中に間抜けなほど大きく響く。私は壁に背中をつけて、天井の「点検中」という文字をじっと見上げた。

「お待たせいたしました。現在、自動点検シーケンスが作動しております。乗車のタイミングと重なっ